

この人に聞く：3

私には子供時代がなかったの・・・

【亀田トミコさん（ニセコ町有島在住）／第1回目】

2017年7月27日

聞き手：井上剛、梅田滋（土香る会）、小坂みゆき（有島記念館）

7人兄弟の3番目

私の歳かい？昭和13年生まれだから、もうすぐ80になるよ。おとうさん（夫亀田満吉さん）より4つ歳下なの。旧姓は高橋、有島第二農場に実家があったんだよ。7人兄弟でね、一番上が兄で今札幌、二番目が打田に嫁に行った姉、そして三番目が私。その下の四番目が江別に居る弟、五番目が新沼に嫁いだ妹、六番目が室蘭にいる弟、そして、七番目が蘭越に住んでいる妹。4人姉妹のうち、私含めて3人がこの有島三にいるんだよ。これも、いろんなことがあってね。

父と私

私ね、子供の頃からずっと大人だったの。子供時代がなかった、というか、子供の気持ちにならなかったことがなかった。私の人生って漫画みたいだ、って思うよ。

どうして、って？私の父親はね、自分にとっても厳しい人で、家族を支えるために自分がした努力を、子供にも同じように要求したんだ。他人には柔らかい人だったけどね。だから、私は遊び盛りの子供のときから、ずっとそんなすごい父の手伝いをしてきたの。一人で頑張る父がかわいそうだと思ったし、そんな父に負けてたまるかとも思って一緒に仕事を手伝ってきたから、私はまるで大人と同じだったのさ。子供たちの中でも父の言う事を聞くのは私だけで、ほかの兄弟たちはみんな父とは距離を置いていた。でも私は、自分がすることでは人に負けたくなかったんだ。だから、父を手伝うために、他の大人に交じって働くことも多かった。

私はうそがうまく言えなくて、大人に向ってもペロッと本当のことを言っちゃうんだよ。だから、学校の先生にはずいぶん嫌われたよ。その話は、また後で言うけどね。私は父から「お前は、あまり大人の中に入って本当のことを言うな」とよく言われたけど、私にはうそを言う智慧がなかったんだね。

私の父親は、明治38年生まれで高橋克己って名前だけど、大正5年、小学6年生の頃、一人で宮城県の南の地方から札幌に出てきて、札幌で土方をしながら測量士の資格をとって、札幌で暮らしていたんです。公務員になろうと考えた時期もあったらしい。その頃、狩太の有島第二農場に、親戚にあたる人がいたんだけど、その人はあまり働かないものだから、私の父親からずいぶん借金をしてたのに返せなくなって、それで借金返済の代わりにその人の農地を父が譲り受けたの。昭和6年ころだって言ってた。有島第二農場では、譲り受けたその農地は狩太でも広い方だったけど、家族の誰も農作業をろくにしなかったものだから、農地は大分荒れていたんだ。父親は、それからがむしゃらに働いて、荒れていた農地を作り直したんだよ。とにかく、何でも自分で工夫して努力する人だった。

そんな父が、あるとき、豊かな農家の末っ子で甘えて育ったけれどとても頭の良い女性が真狩にいたという噂を聞いて、自分独りで結婚を申し込みに行ったんだそうです。ダメでもともとと思っていたらしいけど、その女性の親は、父が働き者であることを知って結婚を許したようなの。父は、そのことにとっても感謝して、母が死ぬまでとても大事にしていた。結婚して子供をもうけたことで、彼女をさらに大切に思っていたんだね。自分は酒も煙草もしなかったのに、街に出ると酒と煙草を買ってきては母にあげていたの。当時の女性としては、珍しかったね。私はそれを見て父がかわいそうになって、「どうしてお母さんにばかりあげて、自分は飲まないの？」って、聞いたことがあったんだ。そしたら、「自分は子供を育てる義務があるから飲まないんだ。お母さんをもらうとき、苦労はかけないからと約束したんだよ」と言った。父はそんな人だったんだ。きっと、私はそんな父親の気質を継いだんだと思うよ。

父は、子供の教育には理解があったから男の子たちはみんな上の学校に進んで行ったけど、そんな父でも、女の子にはそうでもなかったんだよ。私が近藤小中学校を卒業する時、定時制高校だった狩太高校（倶知安農業高校狩太分校）に行きたいと父に頼んだら、はじめはいい返事をしてくれなかったけど、母親が豊かな家で育って教育をしっかり受けて来た人だから、女の子でも学校は大事だとわかっていたんだね、そんな母親の口添えもあって、わたしは狩太高校に行かせてもらった。そう言えば、母親はとても頭が良かったけど、数学だけはダメだったらしくて、父は逆に算数が得意だったから、農業経営には向いていたんだね、きっと。

そんな母親も、年取ってからはハイツの世話になることになったんだけど、おとうさん（満吉さん）の妹がその頃ハイツに勤めていたこともあって、私が50歳くらいの時かな、私の母親のそんな様子を見るに忍びなかったのか、おとうさん（満吉さん）は私の母親を自分の家に引き取って連れて来たんだよ。私の母親も、万吉さんの世話になりたいと思っていたようなんだ。おとうさん（満吉さん）は、そういう人なんだ。だから、93歳で母が亡くなるまでの12年間、この家で一緒に住んだんだよ。

母がおとうさん（満吉さん）に引き取られてこの家に来た時、私の父は、既に70歳くらいの時から札幌の愛染病院（南区）に脳梗塞で入院してたけど、一人で自活していたんだ。

おとうさん（万吉さん）は、宮田にある自分の実家の都築からも親を引き取って連れて来たしね。私は人に負けるのが嫌いな性分だけど、おとうさん（満吉さん）は人には優しいんだよ。

有島第二農場の農家

有島第二農場の農家って、みんなおおらかだったような気がする。酒飲みが多くて、おっとりというのかねえ。酒飲みが多いのは、真狩に近いからだと思う。第二農場から真狩に用事があって行くとき、途中にお酒を売ってるお店があって、みんなそこに立ち寄って飲むんだよ。男は大抵そうだから、そんな男に使える女の人はみんな苦労したんだ。そんな中であって、私の父は自分では酒も飲まず、結婚した私の母親にだけに飲ませたんだから、すごい人だったなあ。

私の小学生時代

私が子供の頃って、どこの家にも多いところで3,4人は小中学生がいて、有島第二農場の15軒で30人くらいいたかな。多いところでは、子供が16人という家もあったよ。狩太村が1万人くらい人口があった時代だったからね、子供も多かったのさ。

私は小学1年生の時に終戦を迎えて、3、4年生の時だったけど、私の家も貧しかったから、学校に行くときも、姉が3年着た服をお下がりで着て行ったんだ。もうボロボロだったから膝やお尻のところは薄くなって透けて見えるものだから、よく男の子らにからかわれた。そのことは気にならなかったけど、男の子らがいつも囃し立てて授業の邪魔になるのが嫌だった。でも、先生は別に注意もしなかったんだ。私のこと嫌いだったからね、その先生。それで、校長先生の部屋に行って、「お金を貸してください」って言ったら、校長先生が、履いていた古い乗馬ズボンを見せてくれて「貸してあげたくても私にもお金はないんだよ」と言って、泣いちゃったんだ。

ある朝、学校に行ったら、児童はみんなデンプン袋を持たされて、学校の周りがあるイタダリの葉を取ってくるように言われたこともあった。タバコの葉として、帰還兵にあげるためのものだったんだね。小学1年から3年生までは、そんなだった。校庭に桑の葉を植えたこともあった。山に自生していた桑を持って着て植えたものだけど、カイコの餌にしたんだよ。

終戦直後ちょっとの間は、こんな風で、軍事教育の名残がそのまま残っていたので、私はおかしいと思って先生に文句言ったんだけど、そんなことをするのは私ぐらいだった。

そんな風に、私は先生にも思ったことをそのまま言ったけど、だからと言って叩かれたことはなかったなあ。私だけにじゃなく、友達にも先生が納得できないことしたら、私はすぐ教育委員会に告げるものだから、そうすると、その先生は、すぐに学校からいなくなった。ある図画の時間の時、その先生がある生徒の絵を破って床に叩きつけてしまうということがあって、私すぐに校長先生に言いに行ったんだ。そしたら、1週間で先生はどこかに変わって行っちゃった。あ、この先生って、おとうさん（満吉さん）をいじめた先生じゃないよ、別の先生。でもね、そんなひどい先生ばかりいたわけじゃなくて、中には、持ってきたおにぎりを、お弁当を持ってこれない子に分けてあげる先生もいたんだよ。だから、戦争が終わってもひどいままの先生もいれば、戦争の時からいい先生もいたんだ。

妹が学校に上がる時、通学の服がなくて、それを工面するのに母親は何もしないので、私が隣の家からもらってきた男の子の服を女の子用にアレンジして妹に着せたんだ。それにもう少し女の子らしいアクセントをつけたかったのさ、いつも私のことを色々と馬鹿にする友達の家に行って、「今日は、ほんとのホイト（物乞いのこと）に来た」と言って、「赤い毛糸3メートル欲しい」ともらって来て、それで花の模様を作ってアクセントにしたら、妹、すごく喜んでくれたよ。

私、他にも、親の役目をずいぶん引き受けたんだ。うちで綿羊を4頭飼ってたんだけど、その毛を刈り取って元町の農家さんに毛を売りに行くのも、私の役目だったし。

高校時代は、第二農場の実家から7キロ離れていた第一農場の打田家に嫁いでいた姉のところに、5日に1回、5升のコメを背負って届けてから学校に行ったんだよ。打田の家に行くと、末っ子で倶知安農高生の元輝さんがコメを待ってたなあ。

亀田家に嫁いできたら・・・

私が嫁いで来たのは、昭和 35 年、私が 23 歳のとき。倶知安農業高校狩太分校で私の先生から、亀田満吉さんと言う人とはとにかくよく動いて働く人だから、ということで紹介されて、先生が仲人になって結婚したんです。

嫁いでみたら、おとうさん（満吉さん）は確かに優しくよく働く人だったけど、家の農業はあまり知らなくて、土建業とか山の木こりとか外に働きに行っていたんだ。それで、実家では水田とか畑とかを父親と一緒にやってきた私だったから、亀田の家の農業はと思って見てみたら、義父の貞勝さんも義母も農作業の段取りが全くできていないんで、びっくりしたんだよ。水田の状態は悪かったし、牛は 7、8 頭いたけど、これは大変だなあと思いましたよ。

家の経済状態を聞いても要領を得ないので、経済の中身を知りたくて取引していたお店と農協に行ってみたんだ。そしてら、両方合わせて 265 万円もの借金があることがわかったんだ。それを返していかななくてはいけないとわかって、私が農業するしかないんだと腹を決めて、まず、5 町歩の農地のうち 2 町歩の土地改良を自分の力でやって、そこに水田を作り直した。古くなっていた家に貞勝さんは手をつけようとしてこなかったの、おとうさん（満吉さん）と私の二人で直したんだよ。そんなふうに頑張って、20 年かけて借金は返すことができたんです。でも、借金があることは、おとうさん（満吉さん）は知らなかったから、私が借金を返し終わってから報告したんだよ。

義父の貞勝さんは、昭和 51 年に亡くなりました。その先代の惣兵衛さんは、体が弱かったそうで、チカばあちゃん、石川県から嫁いできた惣兵衛さんの奥さんが働く人だったって聞いているよ。チカばあちゃんは、私らのことを心配して、よく来てくれたっけなあ。義父の貞勝さんの兄弟は、男 4 人。長兄の貞次郎さんは農業を継がずに、街に出て商売を始めたんだ。一人娘の亀田禮子さんはニセコ市街地で元気に暮らしているよ。結局、次男の貞勝さんが仕方なく惣兵衛さんの農地を継いだんだけど、家業の農業より地域や村のことに力を注ぐことが多くて、結果として様々な公職を引き受けることになってしまったんだね。三男が留夫さんで、この人も有島から出て行って、息子さんの岸本さんがニセコ町市街地にいる。

貞勝さんという人は、有島武郎への謝恩の気持ちが強かった人で、有島ゆかりの 32 軒の一族に、毎年男爵いも 52 キロ入りカマスを 32 俵を笠置商店から借金して送り続けていたんです。自分では作っていなかったから、買って送っていたんだね。有島の土は粘土質だから、おいしい白いも（男爵）は出来ないんだよ。なのに、そんなにしてまでも自分の思いを果たそうとする人だったんだよ。

でもさ、そんなこと続けてたら借金が膨らむ一方だから、と言っても、貞勝さんは自分でそれをやめられる人ではなかったし、おとうさん（満吉さん）もそれは出来ない人なんだよ。かといって続けるわけにもいかなかったから、仕方ないので、私が貞勝さんに交渉して因果を含めてやめてもらうことにし、そのことを有島一族の人たちに伝えるハガキを出したんだ。そしたら、有島家の人からこれまでのお礼とお詫びの書状が来て、どうにかやめることができたんだよ。有島家の人たちは、亀田家の畑で獲れている芋を送ってくれているんだろうと書いていたらしい。

義父の貞勝さんと義母さんの間には子供が生まれなかったの、おとうさん（満吉さん）を養子に迎えたんだよ。義母さんの実家は、弟が樺山で農家をしている。義母さんは、何かあって呉服が必要になると、本家が市街地で呉服店を営んでいる禮子さんとこだから、そこから借りて着てた。義母さんが亡くなった時、貞勝さんは「苦勞かけた」と言わず

っと泣いてたよ。

水田も畑も、私の仕事だったから、田に水を引くときも、日の出前に起きて田んぼに行って有島灌漑溝から日の出前に田に水を引き、日が出たら取水を止めて、田の中で温度が上がるようにしたんだ。

水田の作業の合間に、他の農家の出面にも行って働いたよ。子供の頃から、父親には負けたくないという気持ちで働いてたから、人にも負けまいよう自分で納得する結果を出せるようになって、頑張ってきたんだよ。私の力ではできない作業なんかの時は、おとうさん（満吉さん）に仕事を休んでもらって農作業の手伝いをしてもらっている。だから、やっぱり、二人で農作業をしてきた、ということかな。

小さいときからそんな風に生きてきた私は、異質な人間、異常な人間なんだよ（笑）

有島三姉妹

妹は、新沼に嫁ぐ前、最初弟を頼って家を出て勤めていたんだ。そこをやめた後、姉が嫁いだ打田さんところに遊びに行ってるうちに一緒に住むようになって、そのうち、姉が妹を新沼に紹介して嫁がせたんだよ。そんなんで、うちら三姉妹は、有島第二農場から第一農場に嫁いでしまったというわけなのさ。

この人に聞く：4

私に青春時代はなかったな・・・

【亀田トミコさん（ニセコ町有島在住）／第2回目】

2017年8月24日

聞き手：井上剛、梅田滋（土香る会）、小坂みゆき（有島記念館）

前回の聞き取り内容の中でもう少し詳しくお聞きしたいことがあったので、再びお伺いした。

トミコさんの結婚について、もう少し聞かせてください（質問／小坂）

私が狩太高校に入ったとき、すべてにわたって厳しい先生がいて、怖かったけどすごい人だった。生徒の髪が長くなると、床屋代が無いと思う生徒には自分のポケットマネーを渡してすぐに行かせるような先生だった。生徒には怖がられていた。

貞勝さんが吉川銀之丞さんから農場事務所を買ってそこを謝恩会の有島記念館として使っていたけど、あとになって、火事になっちゃうんだけどね。

私が23歳の時に、その先生が貞勝さんどこに来て、満吉さんと私の結婚を勧めたんだ。私は、打田に嫁いでいた姉のところに寄る時、隣の家で満吉さんを見かけたことはあったけど、好きも嫌いもなかったんだ。先生から私には、満吉さんはまじめで嘘をつかないし、養子で苦労して来て人間的にとってもできた人だから、結婚してはどうか、ということだったから、それならと思って、結婚の申し出を受けたんだよ。色も恋もなく経済で結婚さ。そうして紹介されて半年くらい経ってから、結婚したんだ。

結婚するちょっと前に、満吉さんが盲腸の手術をすることになって、今のクリニックの先生のお父さんだけど、その先生のお世話になったんだ。先生夫妻とはいろんなことがあって、とっても親しくおつきあいしていたんだよ。その手術が治ってから、4月16日にさかい荘という旅館みたいなところで祝言を上げたんだけど、先生が仲人をしてくれた。結婚式は半日で終わって、新婚旅行には行かなかったよ。だって、田んぼも畑もあって、そっちの作業が待たないしだったからね。結婚式には、貞勝さんが公職の多い人だったので、大勢の人が来たよ。50人から80人くらい来たかな。身内だけでも多かったしね。どっかに写真あったと思うけど・・・。

結婚式が終わってすぐに農作業だったけど、種モミの選別や消毒をしなくてはいけない時期なのに、義父も義母もモミのあり場所すらわからなかったんだよ。仕方ないから、私があれこれ調べながらするしかなかったんだ。嫁に来たばかりだということにさ。でも結局、私がなんでもするしかなかったから、亀田家の経済状態はすぐに把握できたよ。呑気な家だったんだよね。

亀田の家の水田は2町歩ほどあったんだけど、そのうちの1.5町歩ほどしか使える状態ではなかったし、それも、むしろ1枚くらいの狭い田んぼばかりで、結局私が土地改良作業をすることにもなったんだ。田んぼには裸足で入ったし、重いものを持ったりするか

ら腰を痛めないように、私は腰にもねじり鉢巻をして出たんだ。もう、がむしゃらに働くしかなかった。

結局、亀田家の農業経営は全て私がやることになったんだよ。お父さん（満吉さん）は出稼ぎで家にいない時間が多いからさ。農作業、家事、育児は全て私一人だし、それに、手間替えもあったし、留寿都のダイコン工場から車で迎えに来る出面にも出た。でもね、私じゃできない作業なんかもあってね、田んぼを起こすのに馬で代かきすることなんかは、おとうさん（満吉さん）が仕事休んでやってくれたんだよ。そんな時も、肥料をまくのは、子供を背負った私の仕事さ。

結婚して2年目の6月末に出産予定だったけど、水田が忙しい時期で、肥料袋を抱えて田んぼに出ていたせいなのか、1ヶ月早い5月21日に長女が生まれちゃったの。髪も薄かったし体も弱い子だったから、この子は小学1、2年生になっても、担任の先生がよく面倒を見てくれたんです。そのおかげもあって、3年生になった時から、ずいぶん丈夫になったけどね。

—子供を産んでからも、働いたの？ 出産してから何日休んだのですか？

出産してから4日も休めなかったな。お産の日がちょうど田植えの時期だったからね。

—子供の名前はどんなふうにつけたんですか？

長女の名前は、私のおばあちゃんの名前が「ユエ」だったので、それに漢字をあてたんだよ。おとうさん（満吉さん）は私に任せっぱなしだったから、私が名前つけたんだけど、ポツと思いついたそれにしたの。

子供の写真も折々に撮ったんだけど、私は田んぼに出て農作業に没頭するしかなかったから、そんな子供の写真もまともに見たことがなかったなあ。

—男の子が欲しいなど、思っていましたか？

特にそうは思わなかったし、姑さん（義母）も、男の子が欲しいと言うような人ではなくて、サバサバした人だったからね。それに、家のことは全て私が働いて仕切ることになっちゃってたから、逆らえなかったしね（笑）。

—結婚式では何を着たんですか？

借りた黒い紋付を着たね。白無垢じゃなかった。髪は、パーマ店で結ってもらった。紋付なんかの衣装もみんなそのパーマ店で支度してくれた。

実家からの嫁入り道具といたら、タンスといっても名ばかりの箱だけでね、その中は空っぽさ。この地域では親戚の女の人たちが嫁入りダンスの中を調べる風習があったんだけど、開けて呆れてたから、私は、「有島第二農場の空気を詰めてきました」って言ったんだよ。嫁入り道具といたらそれだけで、結納金は3万円だったと思うな。結納式はなかったけどね。

私と比べると、打田に嫁いだ姉は、母さんの秘蔵っ子だったから着物を持ってきたんだよ。妹も、私と同じで何も持たされなかったと思う。

(了)